名作歌舞伎全集

第六巻

大塔宮曦鎧　花上野誉碑
扇的西海硯　木下蔭狭間合戦
釜淵双級巴　箱根霊験譬仇討
中将姫古跡の松　八陣守護城
日蓮上人御法海

名作歴史物語全集 六

日高川入相花王
由良湊千軒長者
太平記忠臣講釈
三日太平記
彦山権現誓助剣

発行元
東京創元社

昭和四十六年六月十五日　発行
（昭和四十八年五月十日　再版）

名作歌舞伎全集

第6巻　丸本時代物集五

監修者
山本二郎
戸板康二
利倉幸一
河竹登志夫
郡司正勝

¥1200

発行所
株式会社 東京創元社
代表者 秋山孝男
（162）東京都新宿区新小川町1-7
電話（〇三）二六〇一五五三
振替東京一五〇〇

印刷・株式会社 金羊社
製本・株式会社 鈴木製本所
用紙・株式会社 富士川洋紙店
写真版・（株）興陽社、（株）万英社

検済
49.3.
庶務課

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

1971 June Printed in Japan © TOKYO-SOGENSHA

目次

（名作歌舞伎全集第六巻　丸本時代物集五）

大塔宮曦鎧（身替音頭）……（装置図　高根宏浩）……三

扇的西海硯（乳母争い）……（装置図　釘町久磨次）……二九

釜淵双級巴（釜煎りの五右衛門）……（装置図　萩原勝美）……五一

中将姫古跡の松（中将姫）……（装置図　萩原勝美）……七九

日蓮上人御法海（日蓮記）……（装置図　萩原勝美）……九三

日高川入相花王（日高川）……（装置図　高根宏浩）……一二五

由良湊千軒長者（山椒太夫）……（装置図　釘町久磨次）……一五七

太平記忠臣講釈（忠臣講釈）……（装置図　釘町久磨次）……一八三

三日太平記（三日太平記）……（装置図　萩原勝美）……二〇一
彦山権現誓助剱（毛谷村六助）……（装置図　高根宏浩）……二一九
花上野誉碑（志渡寺）……（装置図　萩原勝美）……二七五
木下蔭狭間合戦（竹中砦）……（装置図　八木恵一）……三〇三
箱根霊験躄仇討（いざりの仇討）……（装置図　高根宏浩）……三一九
八陣守護城（八陣）……（装置図　八木恵一）……三四一
解説　戸板康二
校訂について　山本二郎
写真と資料提供―演劇出版社、演劇博物館、大谷図書館
梅村豊、高根宏浩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

大塔宮曦鎧

（身替音頭）

解説

大塔宮曦鎧

戸板康二

オオトウノミヤアサヒノヨロイ。原作は享保八年二月十七日初日の竹本座に書きおろされた浄瑠璃。作者は竹田出雲、松田和吉（のちの文耕堂）で、近松門左衛門が添削した。

この標題は初段の無礼講の場で、大塔宮護良親王が「曦の輝く如く」りりしい武者の姿を見せることから来ている。歌舞伎では、戦前まで、「大塔宮」をはばかって、「太平記曦鎧」という外題で上演していた。

五段続きの作品で、大塔宮の北条征伐を背景にしている。序段の大内で、六波羅の常盤駿河守範貞が鎌倉の意向で、先帝の末子逆仁親王に譲位するよう奏上する。その親王と高橋九郎が木津川の土橋でひそひそ話し合っているのを、宮の家来赤松則祐が聞きつけ、大力で橋を動かして二人を水に投げこむ。切は栗栖野の万里小路藤房卿の別邸で、無礼講に事よせ、北条誅伐の謀議が行われ、村上義光が土岐頼員の本心をさぐる「つわもの万才」のくだりがあり、宮に忠誠を誓った頼員は聞者の高橋九郎を切る。

二段目の口は斎藤太郎左衛門の館で、頼員の妻の早咲が実父の所に来て、夫に味方するようすすめるが、同意せず、かえって陣太鼓を打ち鳴らすので、妻の不在に不審を抱き戸外で立ち聞きしていた頼員は、責を感じて切腹する。「陣太鼓の段」という場面である。

続いて六波羅の軍勢の「着到馬ぞろえ」があり、近衛通りの松原で、大塔宮が都を落ちて行ったあと、早咲が夫の名を名のって八歳の若宮をつれて来るが、たばかられて若宮は捕えられる。早咲は矢を射られて落命する。

三段目は口が六波羅の館で、ここにのせた「燈籠渡し」の場で、このあとに「若宮紅梅の短冊」というくだりがあり、それから台本の永井右馬頭の邸に斎藤太郎左衛門が上使に来て、三段目の切の「身替音頭」になる。中の一場を除いて、所掲台本のような演出が行われている。

四段目は大塔宮一行の道行「熊野すずかけ」で、宮を待ちかまえていた芋ケ瀬庄司に一旦渡した錦の御旗を、あとから来た村上義光が奪還する。中が戸野兵衛の物狂いで、その狂気を山伏姿の宮の一行が祈って本心にかえすが、兵

衛は宮を首尾よく落すために、わざと偽の狂人になっていたのが知れる。六波羅方についた兵衛の一子大弥太と庄司が、宮のあとを追おうとするのを、嫁の蓬生と娘の呉羽が妨害し、赤松と村上が二人の悪人を亡ぼす。

五段目は六波羅に攻めて来た宮は、斎藤に恩賞を与えようとしたが耳もかさず、逆仁親王を捕えて来て官軍に降伏しようとする卑怯な範貞を切り、雄々しく自決する。

この原作は竹田出雲の処女作だが、近松の加筆のためもあって、文体きわめてすぐれている上に、斎藤太郎左衛門という古武士の堂々たる誠実が、読んでいても、人の心を打つ。

扮装で見ると「玉藻前曦袂」の鷲塚金藤次に似ているが、一応モドリの意外性を手法として持ってはいても、多分こうであろうと思うように、わが道をひたすらこの老いたる主役は進んでゆく。気持のいい役である。

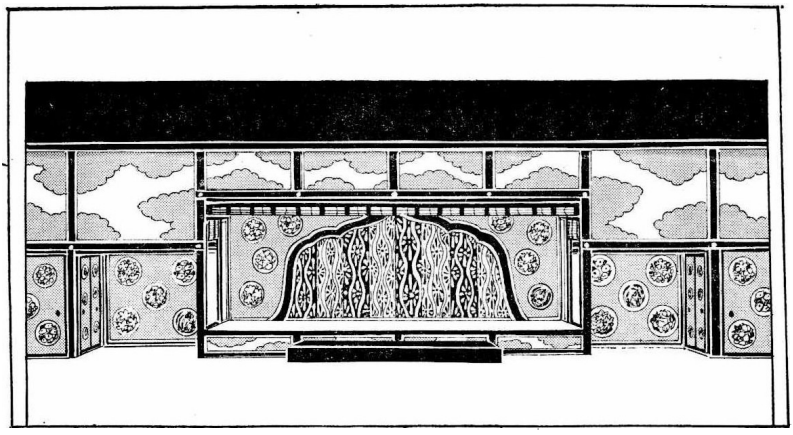
岡本綺堂は身替りの芝居も浄瑠璃も嫌いだが、しいて一つ挙げよといわれたら、この作品をとるといって推賞している。

場景としては「身替音頭」の盆おどりの輪のまわりを、刀をひっさげた斎藤太郎左衛門を右馬頭夫婦と三位局がはらはらしながら見ている緊迫感がクライマックスで、花笠をつけ帷子を着た踊り子の扮装も絵のように美しい。

若君の身がわりに右馬頭の子をあらかじめ用意しているのを知っている観客は、切られたのが鶴千代と思っていると、第三の子役で、二段目に登場した力若が祖父によって打ちとられているトリックもおもしろい。

明治以後、太郎左衛門は三代目仲蔵、九代目団十郎、七代目幸四郎、初代吉右衛門、二代目延若などが演じている。右馬頭夫婦がよくなければ、この芝居はもりあがらない。

大正五年七月の市村座で上演した時は、二段目の陣太鼓の場から出した。三代目菊次郎の花園が傑作だったという。



六波羅の館燈籠渡しの場

序幕　六波羅の館燈籠渡しの場

役名　常盤駿河守範貞。斎藤太郎左衛門利行。大名、六人。近習、三人。小姓、二人。永井右馬頭奥方、花園。

竹本連中

本舞台四間の間、常足の二重、一面の金襖、正面瓦燈口、これに御簾をおろし、左右落間、この前に大名居並び、すべて六波羅の館黒書院の体。管絃にて幕あく。

大名㊀　いかに方々、この度、武家に背きし大内の謀叛顕われ、

同㊁　合戦となったるところ、忽ちにして討ち亡ぼされ、六波羅方勝利となったるは、

同㊂　これぞ全く、君の御武徳二つには、斎藤殿の忠烈のなすところ、

同㊃　それ故にこそ、大塔の宮には落人となりて御行方知れず、

同㊄　御醍醐の帝は、御痛わしくも隠岐の国へ流され給う。

同㈥　八歳の若宮は、御母公三位の局諸共とりことなり、
同㈠　永井右馬頭が預かり、厳しき御警固、
同㈡　その他宮々、公卿、大臣に至るまで、死罪、流罪になったるは、
同㈢　有為転変の、
大名六人　世でござる。
呼び　（向うにて）斎藤太郎左衛門殿御出仕。
大名㈠　何、利行殿の、
大名六人　出仕とな。

ト竹本になる。

〽はや初秋の風の色、黒書院の敷居越し、斎藤太郎左衛門利行、静々と廊下口、

ト合方、鳴物になり、向うより太郎左衛門、烏帽子素袍大紋大小にて出て来り、花道に坐る。この前に御簾上がる。正面に常盤駿河守範貞、白綸子、丸ぐけ、御忌衣にて褥に座し、うしろに小姓控える。

太郎　お召しによって太郎左衛門、伺候いたしてござりまする。

〽申し述ぶれば、駿州見給い、

範貞　ヤ太郎左、早速の出仕、大儀々々。サア〳〵これへこれへ。

〽と招けども、

太郎　ハア。

〽ハッ〳〵とばかり色代す。

範貞　ハテ入らぬ辞儀、手を取りに立ち申そうか。

太郎　これは〳〵、御意を背くは結句慮外、然らば御免下さりましょう。

〽奥詰め御譜代お側衆、歴々を乗り越えて大将と膝組に、媚なくぞ座しにける。

ト太郎左衛門舞台へ来り住まう。

範貞　のう太郎左、この間も申す通り、今度の一戦に切り勝つ事、この範貞が武略にもあらず。御辺、独りの娘聟を見殺し、逆よせにせし忠勤其方一人の高名、則ち鎌倉に言上して追付け恩賞。何れも列座の面々、太郎左を手本に、あやかれ〳〵。

〽と誉められてにっこともせず。

太郎　忠を磨き義を鉄石に比するは、勇者の守るところ、御加増を貪らず、誉められたくも是ござらぬ。

〽と人のそやしにふわ〳〵と、乗らず乗らせぬ人喰い馬、あい口挨拶もぎどうなり。

範貞　オ、その繕いなき心底見込み、頼む事ありて召しよせたり。

〽語り出すも恥ずかしながら、

この範貞はこの程より、恋と申す病に犯され、その病の

範貞　中村富十郎

起りと申すは、永井右馬頭に預けし若宮の母君三位の局、玉章にて口説かんも、俗筆の仮名文、内裏上﨟に嘲弄せられては、大将たる身の無念大恥。如何はせんと思案の末、幸い若宮好き給う、京童の盆踊り、右馬頭が屋敷に入れ、まず お局の心を和らげ、その上に我が恋の、思いをこめし文代わりの、燈籠に言わせしところ、その趣向に絆されしか、靡くと言う返事をば、又燈籠にて送られし、嬉しい心底見せ申さん。（上手に向かい）ヤア〳〵小姓ども、君が方より返事の燈籠、これへ〳〵。

ト上手にて、

小姓　ハア。

へあいと答えて奥小姓、これも他生の振り合わせ、誰が袖なりや色深く、染めて千種の花車、祭る未来のなき魂より、生きて此世の恋路の闇、照らすばかりの風流なり。

ト上手より小姓、誰が袖の燈籠を持ち出で、範貞の前へ置く。

範貞　コレお見やれ。最初に此方より根笹の燈籠に水晶の玉を飾り、上には鳶が羽を伸ばして、鯉を摑む作り物、その心はの、

へ恋に心は飛び立つばかり、二人寝んとの返事の誰が袖。

又此方より松に紅葉の燈籠、焦がれ待つとの心を受け、色に惹かれて巡り寄るとのこの花車。

へ辱けない、

太郎左、太郎左、聞いてか〳〵。

へと言えども更に見向きもせず。

太郎　聾ではござらぬわい。頼みたき事ありとのお召しゆえ、とりあえず参りしに、何を頼む事かと思いしに、当分軍鎮まれども、大塔の宮行方知れず、近国の武士過半心は天皇方。味方の鎧兜ゆるりと脱がれぬこの時節、まだ〳〵と恋話、弦をせき矢の根を磨ぐに隙ござらぬ。燈

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

籠より兵糧の用意が第一。ドリヤ罷り帰ろうか。

〽と立たんとす。

範貞　オ、親爺気短かな、始めを言わねば末聞こえず、斯く恋は叶いながら、迎いの車乗物にて、幾夜待てども今に来ず、老足の大儀ながら、今宵かの君を迎いに、親爺頼む〳〵。

〽頼むという顔をじろりと見て、

太郎　罷りならぬ。斎藤太郎左衛門利行、一生に出合女の取り持ち致さず、始めより媒介の右馬頭に仰せつけられい。夜に入り辻に立つ、夜発の遊女の支配する、妓夫とやらモウとやらの業、侍のせぬ事。もし三位の局、首引き抜いて参れなどとの御用は、何時にても仰せつけられい。はてさて馬鹿々々しい。

〽と重ねて取り付く詞なし。

〽お次の間より薫物の、さっとかおりて御取り次ぎ、

ト向うより奏者の侍出で、花道にて、

奏者　ハッ、申し上げます。永井右馬頭殿の奥方花園どの、三位のお局様よりのお使として、参上いたしてござりまする。

〽聞きもあえず、

範貞　ヤア、その便り待ちかね山の時鳥、早く呼べ〳〵。

奏者　ハッ。（向うへ）お次に伺候の花園どの、御前のお召し、片時も早う。

花園　ハア。

〽招くにおめぬ侍の、奥方の威は生まれつき、三十路余りに老暮れながら、畳触り詞つき、色香残りてうず高く、花園御前に手をつかえ、

ト向うより花園、裲襠形、誂えの浴衣を持ち、舞台へ来て手をつかえ、

花園　夫右馬頭、お預かりのお局様へお文代わりの燈籠、優しい御趣向感じ入らせられ、あなたも燈籠の御返事、その上にこのお浴衣、模様はお主のお好み、磯打つ波に帆掛け船、殿様の恋風を開きに受け、思う港へ焦がれよらんとのお物数寄、残暑のお汗取りにとの、御口上でござりまする。

〽肩にかけしを、取る間遅しと手にとって、

範貞　やれ〳〵、夢か現か、嘘か誠か。我が恋風を帆に受けるは、あっちからもほの字じゃの。おれにほの字の帆が見ゆる、エ、忝ない天の羽衣。

〽と額に当て、顔に当て、

ト浴衣を顔に当て、

ムウ〳〵、こりゃ伽羅〳〵、君が移り香、こりゃたまらぬ。

〽抱き寄せ締め付け、瓶り付き、

トいろ〳〵と嬉しきこなし。

大名㊀　こりゃ御大将の甘い顔、

同㊁　斎藤殿の渋い顔、

同㊂　渋いに甘い柿の本の、ほの〴〵と、

範貞　ナニ、ほの〴〵と、

大名㊃　ほれたほの字は、

範貞　ほれたほの字は、

大名㊄　阿房のほの字でがな、

範貞　中村富十郎

大名皆々　ござろうわい。

〻つもると知らぬ愚かさよ、よう〳〵心落としつけ、

範貞　ヤイ花園、これ程のお情に、迎いをやれども、雨が降る風が吹くとて、ついに枕を並べぬは、底意が解けぬか気が苛れる、心が揉める。どうじゃ〳〵。

〻とありければ、

花園　アヽ、お気のせくはお道理、又あなたにも尤も、私夫婦がたって申せば、涙を零してのう花園、貞女両夫に見えず忠臣二君に仕えず、武士と女の義理は一つ、天皇様のお目をかすめては、末代まで女の悪名、六波羅殿へ申し、天皇様かねてお願いの通り、隠岐の国より還幸ましまし、鳥羽の藁家の古御所に、置き参らせ下されば、若宮様を手渡して、この身はお暇申し受け、いずくに障り支えものう、六波羅殿と添い遂げたい。さものうては下下の女の間男同然とのお話、厭と言われぬ尤もな御心底、兎角天皇様さえ還幸なれば、お前の恋はずる〳〵〳〵。一天の君のお願い叶い、アヽ嬉しやと思し召さば、お殿様の冥加お身のため、国土の為、女の及ばぬ智恵ながら、天下泰平の瑞相と、恐れながら、

〻存じますとぞ申しける。

範貞　尤も〳〵。天皇の目を盗みては女の道立たず、我も男の義が立たぬ。願いの通り天皇を呼び返しても、何事かあらん。膝とも談合、太郎左衛門、分別なんと〳〵。

〻と言うを打ち消す尖り声。

太郎　エ、余程に馬鹿を尽くさっしゃれ。膝とも談合とは似たか〳〵の事、此度敵味方手負い討死何千人、京鎌倉の騒動は、天皇を流すか六波羅殿の切腹か、二つに一つの堺をよう〳〵討ち勝ち半年立たず、太刀刀の血も干ぬ内、天皇を還幸なし、打ち洩らされの宮方隠れ住む真中、王城より一里に足らぬ鳥羽の御所に天皇を置くとは、火燈箱に煙硝入れて昼寝するより危うい事。斯く申す太郎左衛門、聟娘は忠戦の双に死し我は六十に手が届く、歯に衣着せぬ談合はお気に入るまい。寿命長久子孫繁昌後の栄花を楽しむ、永井右馬頭に御相談なされたがよくござろう。

〻膠もしゃ〳〵りもなかりけり。花園くわっと色を赧め、膝に膝を突き掛けて、

花園　これ、斎藤太郎左衛門殿。口上が過ぎる、聞き憎い。又しても忠戦に死せし娘とは、娘の討死が左程自慢か。オウそなたの気では珍しかろ、縦え女でも其家に生まれては、人を斬るも討死も、こちゃ珍しゅうないわいの。したがそなたの娘の様に、夫に無駄腹切らせ犬死するような事は、この花園は得せまい。こればっかりはならぬわいの。それに何じゃ、寿命長久後の栄花を楽しむ右馬頭とは何の戯言。言いかゝっては言いぢらけに済まさぬ女、サア聞こう、サ、サ、なんとでござんす。

〻夫を庇う男勝り、太刀刀持たせなば、斬りかねまじき気色なり。

太郎　ハレヤレ、女中は根強い。申したり饒舌たり。これその証拠は、殿に靡かぬお局の心、燈籠浴衣に見えたるを、却って恋の叶う返事と、当分御意に入らんため、上ずんべりの軽薄は、一寸遁れの身用心、命惜しむ証拠だ証拠だ。

〻と畳叩けば、

花園　アノ置いて下され、埃が立つ。これ忝なくもこちらの夫は、腰折れ歌の一首も連ね、連歌俳諧の文字数も覚えた人、何が恋やら無常やら、田夫野人のそなたが、あんまり口が過ぎるぞえ。三人寄れば公界とやら、年寄りの言い損いは見苦しい、サア言いわけがござんすか。

太郎　オ、聞きたくば言って聞かそう。

花園　承りましょうか。

太郎　オ、言わいでか。

〻互いに膝をすりよせて、

あの誰が袖の模様は立つ波、なみはうらに立つと見るが心の付け処、子供も覚えた百人一首の、恨みわび乾さぬ袖だにあるものを、恋に朽ちなん名こそ惜しけれとの歌の心、天皇を流し若宮を生け捕り苦しむる恨みの涙、乾かぬ人に靡きては、恋に朽ちなん名こそ惜しけれ、口惜しけれと判じたが、叶わぬ恋の第一。色に惹かるゝ車として、櫨紅葉も指さず、薄苅萱萩桔梗、草花繁きはこれ深草、かの少将が百夜の車、小野の小町に誑かされ、九十九夜めに焦がれ死す、叶わぬ恋のこれ二つ。浴衣は波に帆掛け船、思う港へこがれ入るには、揚げたる帆をもおろす習い、この浦船に帆を揚げて沖のかたへ走り船、海の沖を象るお局の魂は、隠岐の国へ通うとの下心、文盲不束な太郎左衛門が見立て、非言あらば打っておみゃれ。

花園　サアそれは。
太郎　判断に相違あるか。
花園　サアそれは。
太郎　批判があるか。
花園　サア、
太郎　サア、
両人　サア／／／／。
太郎　なんと／／。

〽何と／／と責め掛けられ、ハア、そうであったもの、名歌名句も聞く人の、気々によって変わるという、まそっとの所へ心つかず、殿の御前諸人の中で言い籠められ、夫も不勘の誹りを得、エ、口惜しい無念なと、忍び歎けば、大将範貞面色変わり、乾闥婆王の怒れる声。

範貞　靡かずば靡かぬまで、範貞程の者をぬけ／／と誑かす狸女、よし／／この返報せん。（上手に向かい）ヤアヤア誰かある、精霊燈籠持参いたせ。

近習　ハア。

〽外方にとぼす盂蘭盆の、切籠燈籠取りよせて、

ト近習上手より切籠燈籠を持ち、範貞の前に置きはいる。

範貞　両人ともに是を見よ。今日唯今範貞は、局の恋を思い切る、名残りの音物。右馬頭が名代は花園、斎藤太郎左衛門、両人立ち合い工夫せよ。この心を悟りし者は直ぐに使い、口状はこの燈籠にあり。サア、寄って判じて見よ。

〽畏まったと花園が、額を傾け暫く思案し、

花園　ハッ、アゝ聞こえた。総じてこの切籠には四方に四つの角あるもの、帝のお願い叶わず、年に一度の精霊となって、還幸なれとの御口上、永井右馬頭慥かに承知仕

花園　中村歌右衛門　　範貞　中村富十郎

る。

へと引っ提げて立たんとす。

ト花園、件の燈籠を取りに立たんとする。

範貞　ヤイ〳〵、待て〳〵。その様に鈍げな廻り遠い事でなし。太郎左衛門、智恵に及ばぬか。

太郎　ハテ何のこれしき知れた事。切籠とは子を切る、お局の子は若宮、恋の叶わぬ憎しみにて、若宮を切子のお使い、斎藤太郎左衛門承る。

範貞　オ、頓智発明、黒星々々。今宵子の刻知死期までに、若宮の首斬って見せよ。

太郎　委細畏まってござりまする。

範貞　急度申し渡したぞよ。

へと座を立ち給えば、花園駈け寄り裾に縋り、

ト範貞立とうとする。花園ツカ〳〵と出て範貞の裾を取り、

花園　若宮の御首を、余人に打たせては、預かりの規模もなし。太刀取りを右馬頭に、

範貞　ヤア皆まで言うな、ならぬ〳〵。

花園　然らば検使のお役目を、

範貞　ヤア猶々ならぬ〳〵。検使太刀取り共に斎藤太郎左衛門に申し付くる。はや急げ。

太郎　ハッ。

花園　そこを何卒、幾重にも、

ト又すがる。

範貞　エ、しつこい女め、こゝ放せ。

〻こゝ放せ女めと、蹴散らし奥に入り給えば、左右の諸士もばら〳〵と、皆々座をぞ立ちにけり。

ト範貞、花園を突きのけ奥へ、大名達左右の襖へはいる。

〻斎藤も切籠ひっさげ、続いて立つを走りかゝり、長袴の裾しかと踏み止め、

ト斎藤切籠を引っ提げ行こうとする。花園、太郎左衛門の袴の裾を踏み、

花園　太郎左衛門殿、無心がある。大事の預かりの生け捕り、肝心要の落着に、太刀取りも余人、言い渡しの使いも余人、検使も余人に取られては、うっかりと見物する右馬頭何を面目、年寄りに役過ぎた一色渡せ、さもない内は動かせぬ。

〻膝節堅め踏み留むる。

太郎　こざかしき女郎め、脛骨の折れぬ先、退かいでな。

花園　イヤ立ちずくみになっても、返答聞かぬ内はいっかな動かぬ。

太郎　オヽ、その返答はまっこの通り。

〻引く力踏む力、袴の裾はふっつと切れ、躍り出ずるを飛びかかり、烏帽子の頭をずかと摑ん

花園　中村歌右衛門

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com